

106 家紋（2022 年 4 月 7 日）

前回ご紹介した小倉百人一首
(<https://www.fr.emb-japan.go.jp/files/100324873.pdf>) が展示されているディジョン美術館には、江戸時代（1603-1868）に作られた漆の筆筒も見ることができます。17 世紀以降にヨーロッパの王侯貴族の間で漆器が流行し、多くの日本の漆器がヨーロッパへ渡ったことを以前にご紹介しました（※1）。今回は、漆器の筆筒に描かれている意匠に注目したいと思います。



筆筒を拡大した写真の中に、円形の模様があるのがお分かりになるでしょうか。これは、家紋と言って、家系や家柄を表すために用いられてきた紋章です。写真の右側は、羽を広げた鶴を、左側はミョウガをモチーフにした家紋です。ミョウガは独特の香りと苦みがあり、蕎麦や豆腐などの薬味として、日本では広く使われている香味野菜です。大名家のお姫様が輿入れする際には、家紋を入れた嫁入り道具を持参しましたので、これもそのような道具の一つだったかもしれません。



ある研究によると、日本の家紋は 200 種類以上に分類され、そのバリエーションも含めるとその数は5千とも2万5千とも言われています。家紋は、家柄を示すものとして、家財道具だけでなく、武具にも用いられました。身近な植物、動物は道具がモチーフになっています。



ヨーロッパにも紋章があり、ブルボン家の百合やハプスブルク家の双頭の鷲が有名です。ヨーロッパで紋章を使用したのは王侯貴族に限られたのに対し、日本は、皇族の紋章など一部使用が制限されたものを除いて、誰でも家紋を持つことができたのが特徴です。

パリの日本大使館員がフランスで見つけた日本

現在でも、日本の家庭には家紋があります。着物は、色柄や素材によって正装にも普段着にもなります。家紋が入ったものが最も格が高いとされており、冠婚葬祭のときに紋付の着物を着ることがあります。現在では家紋を使うことは少なくなりましたが、古い工芸品や武具には家紋が入っているものがあります。長く受け継がれてきた家紋は、日本の伝統文化の一つと言えるでしょう。

ディジョン美術館には、ジェームス・ティソが描いた「浴室のラ・ジャポネーズ」(※2)もありますので、ディジョンを訪れた際にはこちらもお見逃しなく！

※展示作品は、時期によって変更となる場合があります。

ディジョン美術館 <https://beaux-arts.dijon.fr/> (仏語のみ)

※1

71 日本の漆器とフランスの金細工のマリアージュ

<https://www.fr.emb-japan.go.jp/files/100545637.pdf>

72 南蛮貿易と漆器

<https://www.fr.emb-japan.go.jp/files/100545670.pdf>

※2

69 絵画の中の日本

<https://www.fr.emb-japan.go.jp/files/100205843.pdf>